

# 俳句に見る戦後六十年

太田 かほり

## はじめに

平成十七年の今年は戦後六十年に当たり、六月二十三日の沖縄慰霊の日前後から八月十五日にかけて、新聞テレビなどマスメディアの特集記事や関連番組をはじめ、多くの場所で戦争を検証・記録・伝承しようとする動きが見られた。戦争体験者の高齢化に伴い、戦争の風化が進むことへの危機感が高まっている。

戦争に対する若年層の無知や無関心を示す事件や調査結果も報道された。東京の某高校の英語の入試問題に、ひめゆり学徒隊の体験談を「退屈だった」と感じた趣旨の英文が含まれていたことが伝えられた。教育現場での教師による無神経な事件として顰蹙を買ったのは勿論のことであるが、背景に何があるのか看過できない問題をはらんでいる。おびただしい数の戦争ドキュメンタリーや戦争文学はじめ無数の記録や資料等に接した者ならばそのような発想は起こりえないことであり、その無知無関心への憤りを禁じえない。一度でも一冊でもそれらに目を通した者は戦争という事実とその時の人間の現実に一方ならぬ思いを抱くはずである。いやしくも教育に携わるものは、常識として見識として日本と世界の近代史を学ぶべきである。

沖縄タイムスのアンケートによると、「沖縄戦終結から今年六十年」を認識している県内の高校生は六割未満だったということである。広島県内でのアンケートでも、原爆投下の年月日を知らない県内の高校生の多いことが報じられた。一時期までは定着していた平和教育の現状を分析し、対策を講じることは教育界の急務である。

一方で、体験者が重い口を開き語り始めたという変化や、体験を絵で表現するという呼びかけに多数の応募があったという報道がなされている。また、パリ市が「六十年後のヒロシマ展」を九月五日から三十日まで開催するというニュースも流れた。

文京学院大学併設の中学高等学校では、夏休みの課題図書として毎年大岡昇平の『野火』『俘虜記』、井伏鱒二の『黒い雨』、野坂昭如の『凧になった母さん』『火垂るの墓』などの戦争文学を推薦してきた。それは長い間国語科教科会の申し合わせ事項のように踏襲されていた。しかし、いつの間にか国語の教科書から原民喜の『夏の花』や井伏鱒次の『黒い雨』が消え、石垣りんの詩「崖」も消えた。本校の推薦図書からもこれらの名作は削除された。

本年度前期の英語英文学科の「国語表現」および経営学部と外国語学部の「日本語文章表

現」の授業では、「身近な小論文を読む」というテーマの下で、新聞記事を素材とした授業を行った。各自が切り抜いてきた社説やコラムに、

- ①筆者の意図を汲んだタイトルをつける
- ②キーワードを抜き出す
- ③要約する
- ④筆者の主張をまとめる
- ⑤自分の意見を書く

という作業を課した。時期が六月の沖縄慰霊の日前後であったこと、天皇皇后のサイパン訪問があったことなどのため、学生が選んだ記事に沖縄戦はじめ戦争に関するものが多く見られた。本大学は日本各地から学生が集まっており、当該クラスには沖縄出身者も複数在籍し、彼らが経験した平和教育についての概要も聞く機会を得た。

「国語表現」および「日本語文章表現」の授業では、書く前提として、広く社会や世界に興味・関心・意見をもつように促している。優れた小論文を書くためには自己の考えや主張を明確にもつことが第一であり、文章表現上の技術や知識は次の段階であると考えからである。その意味において今回の「戦後六十年」は、学生の関心を集めることができたテーマであり、思索を深めさせる機会となった。核の脅威が進む中、また、戦火の絶えない世界情勢の中、世界に目を向けさせる切っ掛けとなったと思う。

当授業の最後に、現代俳人池田澄子の句集『たましいの話』（平成十七年七月発行）から、作者がテーマとしている戦争を素材とした次の三句を板書して紹介したところ、予想以上の強い関心が示された。

前へスス前へススミテ還ラザル 池田澄子  
忘れちゃえ赤紙神風草むす屍 //

泉あり子にピカドンを説明す //

俳句ブームといわれて久しいが、俳句人口およそ一千万人の多くは中高年であり、若い世代の関心は皆無なのが現状である。このままでは日本の伝統文芸の行く末が憂慮される。小中高の学校教育を通して、詩歌単元全体が軽視されているのが現状であり、現代俳句に至っては触れる機会は極めて少ない。稀には今年で八回目となる松山市青年会議所主催の高校生による「俳句甲子園」の例があるものの、十代後半から二十代にかけての学生が俳句に、ましてや戦争を詠んだ俳句に興味関心を示すことは予想外であった。中にはノートに書き写す者もいた。

これは、池田澄子への何よりのの出版祝いになったことは想像に難くない。というのは、「忘れちゃえ」の句について、その発表当時、俳誌「みちのく」主宰原田青児や「いろり」主宰保坂加津夫などが「反国家的」として、池田澄子の俳人生命を抹殺せんばかりに激しく非難したという事実があったからである。戦争俳句の文学史的流れや文芸の表現技巧についての知識があれば、作者の真意を曲解することはないはずである。

戦前戦中戦後を通して、戦争俳句は常に詠まれつづけてきた。そして幾人かの俳人は、当局

によって厳しく弾圧された。京大事件などである。それについての資料・研究は多いが、近刊では俳人宇田喜代子の『ひとたばの手紙から』に詳しい。

この稿では、戦後六十年を機会に、俳句文学史には未だ登場していない西暦二千年以後に発表された現代俳句の中から、戦争をテーマとした作品について解釈と鑑賞を試みる。そして、俳句を題材として戦争の歴史および戦後史を伝えるという二十一世紀の課題の手掛かりを得ると共に、多くの教育現場で手付かずの俳句分野への足掛かりとしたいと思う。

## 第一章 池田澄子の俳句から

現代俳人池田澄子は昭和十一年生まれ、現在七十歳である。四十代後半頃より三橋敏雄（大正9～平成13）に私淑し、後、師事した。三橋敏雄は、「新興俳句」に共鳴して作句を開始し、渡邊白泉（大正2～昭和44）・西東三鬼（明治33～昭和37）に師事した俳人である。「新興俳句」とは、近代的な感覚による表現や思想性・社会性の表現を目指した。それぞれの句を次に挙げる。

戦争が廊下の奥に立つてみた	渡邊白泉
銃後といふ不思議な町を丘で見た	〃
憲兵の前で滑つて転んぢやつた	〃
広島や卵食ふ時口ひらく	西東三鬼
兵隊がゆく真つ黒い汽車に乗り	〃
いつせいに柱の燃ゆる都かな	三橋敏雄
あやまちはくりかへします秋の暮	〃
戦争と畳の上の団扇かな	〃

これらの句を見ると、池田澄子の句風は師の流れを汲んでいることは明らかである。今日、池田澄子の戦争をテーマとした作品への不適切な攻撃は、これらの俳句史に残る作品への認識不足によるものである。渡邊白泉・西東三鬼・三橋敏雄らは、自らの思想に基づいて積極的に戦争をテーマとした俳句を詠んできた。俳句は師系を重視する文芸である。誰を師としたかによって俳人としての立場が決定されるという不自由な面が否めないが、それだけ師の影響が強く及ぶということである。終戦時わずか十歳という池田澄子が戦争を詠むのは表現者としての世代の責任を認識するが故であろう。もの心つく頃の自己を取り巻く空気は誰に限らず生涯を決定し方向づけるものとなる。そこに強力な師がいればその影響下で自らの思想の構築を行うことになる。池田澄子の個性的な表現は誤解を呼ぶことがあり、物議をかもしることにもなっているのは、ひとえに読み手側の読解力不足と俳句史の知識不足が原因である。

池田澄子に強い影響を与えた三橋敏雄の句について、拙著『俳句回廊』より引用する。

あやまちはくりかへします秋の風	三橋敏雄
-----------------	------

下五を「秋の風」という形で鑑賞したところ、作者の三橋敏雄氏より「秋の暮」と治定された由のお葉書をいただいた。いきなり平手打ちを食らったような衝撃を受けた。採り上げる時点で出典に当たるといふ基本的な手順さえ省略したのは、推敲される余地があるとは思ってもよらなかったためである。平手打ちの衝撃は推敲の事実を知らなかったことに対してではない。「あやまちはくりかえしません」という広島の平和の誓いをこのようなもじりで言っただけ、強い反戦思想を表明した大胆な発想にまずは驚かされた。「歴史は繰り返す」という負の格言がすでに存在するが、いわばこの格言の俳句版と言ってよいだろう。人間が性懲りもなく繰り返すあやまちに絶望し、崩折れては立て直す強靱な思想に裏打ちされた作者の全人格を賭しての一句である。下五の如何によっては俳句生命を断つかも知れない危険を冒して成した一句であろう。上五中七がパロディの域を超え、「秋の風」の措辞によって何者をも黙らせる凄みとなって伝わり、初案に強烈な衝撃を受けた。だが、「秋の風」と置いた場合は、上五中七が周知のフレーズであるだけに非常に危ういところで踏みとどまっているという印象が残る。本歌取り的手法はたやすくできた作とみなされなくもない。「秋の風」は決して軽々しくはないが、重たく深刻な内容から作者自身が身をかわす、投げ出すという識者にありがちな無責任な態度を感じさせなくもない。警告だけはするが泥にまみれてまでの行動はしないという立場である。「秋の暮」には覚悟のようなものが沈んでいて作者の思想が濃く表れる。「秋の暮」は詩歌の伝統を背負う語である。あはれ、をかし、幽玄、ほそみ等等など思い浮かぶ限りの美の理念を包含する言葉である。言わば、日本の自然が育ててきた文化全体と、「あやまちはくりかへします」とを、互角として勝負に出たと言ってもよい。詩歌の伝統のすべてを代償としてでも、「あやまちはくりかへさせません」と、作者は居直ったのである。俳句を通しての責任の取り方として極めて重たい季語を据えたものと思う。平手打ちを食らったようなとは、作者の指摘に一瞬にして組み伏せられたということである。

次の句については筆者は平成十三年俳句総合雑誌「俳句研究」十月号に発表当時、次のように鑑賞し、俳句月刊雑誌「浮野」に掲載した。

忘れちゃえ赤紙神風草むす屍 池田澄子

赤紙は召集令状、神風は特攻隊、草むす屍は未だ遺族のもとに戻らない戦死者の亡骸をいう。この無造作に見える名詞の羅列は激動の時代の一国民の逃れ得なかった運命を物語る。一人一人はあまりに非力にすぎ、多くの人が時の流れに抗うことが出来ずに無念の人生を余儀なくされた。その時代の一国民の無念さをこれほど端的に表す言葉はないだろう。言葉の羅列で以てやり切れないさや憤りや悲しみを強烈に訴えかける。これは女の側の悲しみである。女がこれほど直截的に表した例は少ない。感情の抑制をある意味でのあらまほしき女性像とすると、この露骨さは顰蹙ものである。「忘れちゃえ」も不謹慎に尽きる。だが、これだけの負の表現が作

者の真意を確実に伝える。「忘れちゃえ」の投げやりでぶっきらぼうではしたくない台詞が、作者の嗚咽であることを理解しない者はないだろう。三つの名詞は連想ゲームでもしているかのように密接にかかわり、付き過ぎも付き過ぎ、技巧も工夫も能もないかに見える。一句で以て強烈な個性をもつ言葉を三つまでも並べ立てて乱暴に提示する。その手荒さが悲しみを表すことも、読者は、理解する。普通は強いもの同士はうち消し合うことになるのだが、逆に手を結んで強烈にものをいう。目茶苦茶に憤ろしい気持ちが真っすぐに伝わってくる。言葉の羅列は時間の推移も表す。赤紙が来て、あるいは志願して、その先に逃れ得なかった死が待ち受けていたというのである。

また、平成十七年十月刊行の角川書店の俳句総合雑誌「俳句」の特集には次のような小文を寄せた。

投げやりでぶっきら棒で不謹慎な台詞に、募る一方の激しい憤りが噴出している。無造作で技巧も工夫も計らいもない言葉の羅列に、かえって強い思想が表れている。戦後六十年、もう言わないという諦めが良識になりかかっている現実に対する抵抗の精神が伝わってくる。言葉遊びをするかのように時代の禁句を三つまでも並べ、自己の姿勢を鮮明に提示する。ペンも武器になるが、切っ先を戦争に向けた言葉の凶器である。文芸を以ての抵抗である。凶暴な表現が誘う危険を顧みない作家魂に圧倒される。手荒な表現を選択した真意を誤解する者こそ、謗られるべきである。なぜ、詠むか。文芸には救いもなければならぬ。この句は、心の底から守りたく、無念にも守れなかったものを抱きつづける人々への力強い激励となる。稚拙で無防備な表現であるが、その飾らない真意が誰よりも草むす屍を慰めるだろう。三橋敏雄の「あやまちはくりかへします秋の暮」と同じく、逆説的な手法による俳人としての全人格を賭した作品である。

次の句も極めて印象鮮明、池田澄子の個性がよく表れた作品である。この句の発表は平成十二年頃である。発表と同時に筆者は次のように鑑賞し、俳句月刊雑誌「浮野」に掲載したものを引用する。

前へススメ前へスミテ還ラザル 池田澄子

「ススメススメ兵隊ススメ……」、これを目にした記憶はないのだが、耳にした記憶がある。口にしていただのは大正生まれの母であるが、母は小学校から戻ってきた一年生の弟が毎日唱えるので覚えたのだという。母の頃は「ハナ・ハト・マメ・マス・ミノ・カサ・カラカサ」だったものがいつの間にか「サイタサイタサクラガサイタ」になっていたという。その弟は十人姉弟の末っ子に生まれたたった一人の男子であったが、特攻隊に志願して「還ラザル」一人とな

った。「還ラザル」人々の中には九人の姉妹の若き夫や許婚などもいた。来る日も来る日も峠まで迎えに行っては空しくもどって来たという伯母、戦友のもたらした夫の最期の有り様に自らも食を断った伯母。「還ラザル」人を父に持つ従姉妹は母方の実家に引き取られ、大家族の軌轢の中で育った。この句から筆者が思い出す身近な出来事はこのくらいであるが、女たちが流した涙は想像にあまりある。

小学生が元気よくおさらいする「ススメススメ兵隊ススメ」は、死に向かって直進すべく駆り立てる号令であった。勇ましく、分かりやすく、声高で、疑いを抱かせる隙もなかった。禁句のような忌まわしいフレーズを大胆に用い、「前へ進む」という平時においてはプラスになるはずのものがマイナスを招き、パラドックスとなり得なかった悲劇を打消の助動詞で強烈に描いている。

平成十七年七月に刊行になった句集『たましいの話』には戦争に関連するものとして次の句が収められている。

泉あり子にピカドンの説明す 池田澄子

「泉」が季語であるが、「ピカドン」も季語にならないだろうか。どちらも夏であるが一方は涼しさを、一方は暑さ・熱さを本意とする。泉には精神的な清らかさや天国や極楽のようなものさえ感じさせる。ピカドンは現実にこの世のものだったとも思えないが、実際にこの世にあった炎熱地獄である。両者は本来同時に存在しえない言葉であるが、白と黒を並べるように泉によってピカドンの悲劇が鮮明になった。対比の効果は侮りがたく大きい。ピカドンは幼児語ではないが、その呼称を使うことによって現実感や臨場感を出した。ピカドンは愛称ではないが、この言葉によって巨大な悪をリアルに、そして身近に、しかも一般庶民の老若男女を無差別に襲った悲劇を正視させる力がある。子供の耳にはピカドンという響きの方が伝わりやすい。原爆という抽象語よりイメージが膨らませやすい。ピカッと光ってドンと落ちたというオノマトペが直截に子供の心に恐怖を起こさせる。忘れてはならない歴史の事実を子供に伝えるのにピカドンの一語は大きな威力をもつ。原爆を製造したのはアメリカであり、ピカドンなる言葉を作ったのは日本である。誰ともなく言い出した言葉であると思うが、被害者たちが未曾有の悲劇をピカドンという具象語で表現したことに激しい衝撃が感じられる。戦争は語り継がなければならないはず、ピカドンという日本語も負の遺産として伝えられなければならない。「泉」ということばに救われる。これは作者が平和への強い意志をこめて選んだ季語であろう。この世に「泉あり」、そして同じこの世に戦争もある。

八月十五日真幸く贅肉あり 池田澄子

八月十五日は言うまでもなく終戦記念日、人によっては敗戦記念日としている慟哭の日である。『昭和万葉集』には、「幸く」あれと送り出したり送り出されたりした幾たりとも知れない人々の悲しみの歌で埋められている。〈父母が頭かき撫ぜ幸くあれていひし言葉ぜ忘れかねつる〉は、千数百年前の『万葉集』に防人の歌として収録されているものである。単独で読むべきではあるが、太平洋戦争に召集された兵隊たちの見送りの場面とオーバーラップして、いつの世も変わらない人間の情愛に感動を深くする。少年防人は出立に当たって「達者でな」と言いながら頭をなでてくれた父母のことをはるかに偲びながら任務についているのである。

「真幸く」は、しあわせに・平安に・無事になどの意味である。敗戦から半世紀、日本は食物のみならず物にあふれ、いろいろな意味で飽食の時代となった。心身の究極の飢餓状態と、身にも心にも贅肉をつけてしまった現在の状況との対比に、痛烈な風刺がある。この句は現代人の物質的幸せはいったい何がもたらしたのかを詰問する。真の「幸く」とは何かを問いかける。健やかさと贅肉とは相反する。むしろ不健康と言うべき肉体の状況を古語を用いて表し、肉体に宿る精神の弛緩したさまを暗示する。敗戦という負の財産の上に安住する現代人の醜さを、他者ではなく自らの上に見ているのである。自らを戯画化し、悪びれつつ現状を否定している心が表れている。

池田澄子は個性的な作風で知られるが、その個性の一つとして戦争を詠みつづけ、波紋を広げてきた。短歌においてはこれまで俳句以上に戦争体験を作品化したものが多く見られた。例えば、朝日新聞の朝日俳壇には年間を通じて戦争をテーマとした作品が入選してきたが、昨今では体験者の高齢化によるものか、めっきり減少している。専門俳人による戦争俳句は次第に消え行く運命は免れないが、世代の責任として、生涯詠み続けようとする池田澄子の姿勢に強く共感する。

## 第二章 近刊句集から

### 1. 西嶋あさ子句集『埋火』より

俳人西嶋あさ子昭和十三年生まれ、現在六十七歳、俳句同人誌「瀝」編集責任者、句集『埋火』は平成十七年七月の刊行である。

白日の師の句碑八月十五日 西嶋あさ子

前書に「てんと虫一兵われの死なざりし 敦」とある。てんと虫の句には「八月十五日終戦」の前書がある。この句は安住敦の代表作である。安住敦は終戦当時三十八歳、対戦車自爆隊の一員であった。死と向かい合った日々から解放された気持ちが率直に「死なざりし」と述懐され、命への愛惜が強く伝わってくる。作者一兵のみならず当時の兵隊一人一人の偽らざる感慨だろう。現代語でいえば「死ななかつたことだよ」という台詞になるが、実際に幾人もの

兵隊がこの言葉を口にし、自らの運を思い、他者の不運を思ったことだろう。

天道虫は丸く小さく黒光りし、甲の赤い斑点が愛らしい。指に這わせてくすぐったく、ブローチのように胸に飾ってみたいくなるような虫である。いかにも小さく、目に止まって楽しく、害にならない虫である。その天道虫のように小さく無害なささやかな存在としての自らの命をどんなに愛しいものとして見つめたことだろうか。この万感迫る一人の兵の言葉を、いや、幾人とも知れない生き延びた人々の言葉を、作者は毎年毎年の夏毎に深い感慨をもって反芻する。思い出さない夏などない。深くもの思う日に、もの思いをさらに深めるよすがとなる句である。それが敬愛してやまない師の代表句であるとなるとその思いは一通りではない。師の代表句が終戦の感慨を詠んだものであるということは、弟子にとって重い。師弟の出会いはいは昭和四十年代、その交流は戦後も二十数年を経て平和な時代になってからのことであつたとしても、俳句史に残る師の代表句が折々に弟子へ影響を及ぼしたことは想像に難くない。評論『俳人 安住敦』をもつ作者であつてみれば、句そのものも句碑も格別のものであるはずである。師を亡くした弟子にとって句碑は墓碑でもあろう。八月十五日は戦争からの生還の日である。何十年後のその日、語り継がれるその日さながら暑い暑い一日、それも白昼、句碑の前にたたずむ。八月十五日の事実の前に立つ。「白日の」には、憚ることなく「死なざりし」と言える時代とそうではなかった日々との対比がされ、あらためて死ななかつた命への労りの心が託されている。だが、「死なざりし」命も歳月の流れ、人生の自然のままに今は亡きことを思うのである。この句には時間というもの——重く長く意味ある時間が凝縮している。

あるまじき戦を経たり手毬唄 西嶋あさ子

「戦」は最近起こった戦争を含む複数のあるいは無数の戦争と考えるのが適当だろう。「手毬唄」は昨日今日生まれたものはない。古くから口伝えに広まり歌い継がれて遊ばれたものであることからすると、近代になってからの戦争ばかりともいえない。人間の歴史とは戦争の歴史でなかつたともいえない。既に二十一世紀となっているが、少し前の二十世紀を言い表す言葉として「戦争の世紀」というとらえ方もされ、二十一世紀こそはと迎えた新しい世紀は9・11同時多発テロによって世界に戦争が拡大していった。どの時代のいつの戦争であれ戦というものは最新の武器や兵器が動員されて、あらゆるものが破壊される。人の命、生活、自然などありとあらゆることごとくが取り返しのつかない事態に陥る。人間はいやというほど戦争の歴史をもちながらそれを繰り返す。「あるまじき」は「あつてはならない、すべきではない」という禁止を表す。人々の了承事項である禁止すべき戦を経て人々は今を生きている。手毬をつきながら唄う「手毬唄」は優しい音楽である。女兒が遊ぶ様子は愛らしい。その子供の世界にも戦争はやってきた。戦と手毬唄との意外な組み合わせによって、人間の現実を描いた。



## 2. 八田木枯句集『夜さり』から

八田木枯は、大正十四年生まれ、現在八十歳、俳誌「晩紅」主宰、平成十六年九月、句集『夜さり』を刊行した。

戦死して蚊帳のまはりをうろつきぬ 八田木枯

作者は終戦の年、二十歳前後である。家族や友人知人という親しい間柄に戦死者がいる世代である。英霊というにはあまりにも親しい人の戦死を悲しむ。兵隊として日の丸と万歳で送り出された人が懐かしい家族の元に戻ってきて、玄関ではなく蚊帳のあたりでうろうろしている。玄関で直立不動の敬礼をする姿ではなく、夜陰に紛れて家族の寝息をのぞきこむかのように、家族の体温を恋うかのように寝室に現れたのだ。うろつくという行動には勇ましさも気負いもない。人間としての本能的な感情と人間としての正常な感情にのみ支配された人間らしさがこの言葉にあふれている。戦死者が最も戻ってきたかった安住の地、家族の安らかな眠りのほとりにたどり着いて、しかし、蚊帳という隔たりによって触れ合うことができない。家族を守る蚊帳の内に入ることができない。蚊帳に優しくも厳しいものとしての暗喩があり、切ない。戦死者が野良犬のようにうろつくとしたところに作者の戦争への姿勢が強く出ている。

原爆忌折鶴に足なかりけり 八田木枯

正方形の紙を山と谷を作りながら折り重ねていけば簡単に鶴ができあがる。出来栄えのよしあしはあまりなく誰にでも折れ、折った指の記憶は案外正確によみがえるものである。飴を包んだ包装紙などを無意識に鶴に折っていたりする。形が美しく折り紙といえば鶴となる。日常に根付き親しまれている日本の文化である。さて、折り鶴はそれで完成された形である。腹部に息を吹き込んで膨らませると紛れもなく鶴である。置けば今にも飛び立ちそうにも、今し方舞い降りたようにも見えて、紙の作り物だが見るものの目はしっかり鶴だと見ている。本物の鶴は足が美しい。たいていの生き物は足が美醜の分かれ目になる。鶴も白鳥も足が美しい。鶴の絵は一羽は立ち一羽は座っているというのが多く、より鶴らしく見せるのは立ち姿の方である。となると、折り鶴に足があってもよさそうなものであるが、誰も折り鶴に足をつけようとは思わない。折り鶴はあれで完成された美しい鶴の姿を表している。足などつければまさしく蛇足ということになる。ここで、折り鶴に足がないという常識が決定的に不条理なことになる。原爆の犠牲者に捧げられた幾万とも知れない千羽鶴に当然どれにも足はない。折り鶴に足がないのは常識であるが、実際にはあるものがないのは事実である。折り鶴に足があっては美しさに欠ける。あるものを省略して折り紙芸術は完璧となる。しかし、完璧なもの、美しいものにふと欠如したものがあることによって作者は思い当たったのだ。原爆とは、その傷とは、あるべきものがないという状態に酷似してはいないだろうか。

### 3. 鷹羽狩行の句集『啓上』から

鷹羽狩行は、昭和五年生まれ、現在七十五歳、社団法人俳人協会会長、俳誌「狩」主宰である。平成十四年八月に刊行された句集『啓上』は異色の挨拶句集として、注目された。

葉桜や若き盛りの人柱 鷹羽狩行

一家の大黒柱、希望、誇りとなるはずの若い者が、一柱と数えられる神仏になってしまった。この世には存在せず、魂の宿るべき肉体を失った。その絶望と怨念は五十数年を経ても家族の胸に消えることはないだろう。人柱という前近代的な手段を以て若者たちは家族を守るべく出陣し、露と消えた。人柱とは犠牲である。自らの肉体を盾にして、守るべきを守って、代って死ぬ。自分の家族、自分の国、自分を育んだ自然を守るために死を受け入れたのだ。人柱に立ったその人の命も守られなければならなかったはずだが、この国のその時代に生まれ、その若さであったがために死ななければならなかったのだ。声を潜めて使われる人柱という言葉を開けっ広げに使う。作者は、若者の命の代償として今日の自分の肉体と生活と安穩があることをその御霊に告げる。死者への手向けの一句である。

雲の峯よりも高きに人柱 鷹羽狩行

空の一角にむくむくと豪快に湧き上がる夏の雲。形の面白さ、重量感で「雲の峯」は人の目をひく。坊主頭の人または化け物を入道というが、その名の通り、大きな生き物を思わせて、時には威嚇し、時々人は人の面影を重ねる。雲の峯が立つ、入道雲が立つなどと表現するが、人柱も立つと表現する。橋や土手などの難工事に際して生きたままの人間を神に捧げるという儀式が、その昔には行われた。自然に対して人間が謙虚であった時代のことである。生け贄によって荒ぶる神々を鎮め、工事の完成を期したのである。しかし、如何なる目的であれ、犠牲を求められる側は、ひたすらに切なく、苦しく、憤らしい。人柱は水底あるいは地中に埋められる。埋められたが最後、人目に触れることはない。その人柱が雲の峯よりも高い位置に立つ。見えないはずの人柱が白昼、誰もが見ることのできる高みに見える。見えるはずのないものを悲しみの心が見る。それを幻という。仰ぎ見る位置に人柱を立てたところに作者の追悼の心がある。

葉桜や杖まぼろしの九段坂 鷹羽狩行

桜から連想するものは多い。桜のせいではないが、あの戦争には桜までも動員されたようなものである。一斉に咲き、一斉に散る。花が終われば葉桜となる。桜の喧噪が遠のきやがて葉桜、つまり戦後となったという時の流れが季語に読み取れる。九段坂から連想するものは一つ。

そこに靖国神社がある。明治以降の戦没者を祀る。だが、多くは、太平洋戦争の犠牲者を思うだろう。「杖まぼろしの」が直接間接に知るその人あの人に重なるからだ。その人あの人最愛の対象がその向こうに見えてくる。若き夫・若き息子のまぼろしを心に抱き、杖にすがりながら靖国神社を訪れる老いた姿もまたまぼろしであるというのだ。死者ばかりか生者もまぼろしなのだ。玉砂利を踏む足音、杖をつく音が幻聴のようにかすかに聞こえてくる。今の世への何にもまさる警告として。

句集『啓上』には昭和五十八年から平成二年にかけて「靖国神社みたま祭（献句）」の前書きがついた句が詠まれている。私事ながら、知人に誘われてみたま祭に靖国神社および記念館を訪れた。九死に一生を得たその知人は、神前に直立不動の黙禱をささげた。彼もいずれ杖の人となろう。境内には背も腰も丸く老いに老いた参拝者の姿があり、胸を突かれた。「杖まぼろしの」生き証人だと思った。

#### 4. 片山由美子句集『風待月』から

俳人片山由美子は、昭和二十七年生まれ、現在五十三歳、俳誌「狩」同人、平成十六年七月、句集『風待月』を刊行した。

色変へぬ松や昭和の傷深く 片山由美子

数ある樹木の中でも松は特別に格が高い。他の木々が色づき葉を落としその姿を変えていく中で、変わらない松の姿は重厚な存在感を示す。樹齢や年輪という言葉で樹木を人に見立てたり、風説に耐える姿を人間に重ねたりするが、人間を超え、人間が織り成す時代という塊にも準えられる大きな雰囲気は松には備わっている。樹木を人格化できるように、時代も人格化できるのではないだろうか。昭和という時代の特殊性、その個性には嫌悪も愛着も懐旧の念も悲哀もあろう。時代とは巨大な生き物のようなものである。明治・大正・昭和、この激動の時代にはそれぞれに個性があり特徴があるが、平成の我々にとって昭和ほど慕わしい時代はないのではないか。過ぎ去ったもっとも近い過去を愛しく思うのは人間の情であろう。昭和の人々は、大正を、大正の人々は明治をと、元号によって区切られる一時代をそれぞれに格別の感情で記憶する。昭和時代を一本の松の巨木に譬えると、目に映る堂々たるものの裏面あるいは内面には暗黒の洞、すなわち戦争という大きな傷が認められる。それも浅くはない傷である。この句は我々のイメージする堂々たる風格の松に昭和という時代を重ね、陰と陽の両面のあることを表した。構成上は「色変へぬ松や」と「昭和の傷深く」の間には大きな屈折がある。その屈折によって前者の陽と後者の陰をつなぎ、一色にはならない時代の明暗を詠んだ。八音プラス九音すなわち十七音から季語を除くとまことに過激なフレーズである。しかし、作者が物を言わせたのはこの九音の方ではなく季語である。「色変へぬ松や」に昭和という巨大な生き

物の全貌・全容が描かれ、また、深手を負った昭和時代への一通りではない愛惜の情が憚ることなく表明されている。傷への憎悪や嫌悪のみならばこの季語は使われまい。この季語の持つ十全の力を見事に見事な作品である。

## 5. 合同句集『丘の会』から

朕といふことば八月十五日 和田知子

日本語には人称代名詞が多い。それは一面では日本語を豊かなものにしていて、同時に人間同士や自他の関係を区別することにもなっている。言葉の豊かさは数の多さによるものではなく、その言葉の使われ方、イメージの喚起力によるところが多い。「朕」はもとは一般に自分をいう言葉であったようだが、秦の始皇帝以来、天子の自称の言葉となったという。日本では天皇の一人称であるが、今日では歴史上での言葉となり、実際の社会で聞くことはない。現天皇も「わたくし」という自称が使われる。すでに古語ではあるが、現実にこの言葉を生活の中で耳にした世代にとっては単純に古語として、また人称代名詞の一つとして見ることはできないことは否めない。「八月十五日」との結び付きで、このものを言えない俳句形式が実に膨大な人間の感情を言い表している。

沖縄や軍壕深く虫の声 山上峰春

沖縄には無数の防空壕が残っている。自然の洞穴を使ったものもあれば、旧海軍司令部壕のような四千人の兵士を収容した大掛かりな軍用のものも残されている。それらは忘れられない二十世紀の爪痕、沖縄戦の悲劇を語り継いでいる。宜野湾市の佐喜真美術館には丸木位里・俊作の「沖縄戦の囚」が展示されている。民間人が身を潜めた壕の中の現実を想像を絶する。そこは集団自決の舞台ともなった。丸木夫妻の絵には、鎌や鍬や刺刀で親は子に、夫は妻に、若者は年寄りに手を下した様子が圧倒的な悲惨さで描かれている。画家が生き残った人々と共に現場に立ち、その証言や体験を聞いて再現した修羅場である。軍壕においても米軍の猛攻にあい、軍の幹部たちが自決を遂げている。その惨劇を今は虫の声に偲ぶのである。断末魔の声ともいえない声が渦巻いたであろう。風流な秋の虫の音が風流とは裏腹に人々の声なき声、無声慟哭となって迫ってくる。風流ゆえに悲惨さを際立たせる虫の声。虫は声をあげてその惨状の語りべとなっているのだ。

## 第三章 最近の俳句総合雑誌および結社誌から

### 1. 川崎展宏の新旧作品から（昭和二年生まれ、現在七十八歳）

「大和」よりヨモツヒラサカスミレサク 川崎展宏

すでに作者の代表作となっている句である。戦艦大和が、およそ三千の命とともにアメリカ機の攻撃を受けて沈没したのは、昭和二十年四月七日のことであった。呉港を出た後、内地の早咲きの桜を双眼鏡にとらえ、先を争って眼に焼き付けようとしたという話は、悲惨極まりない大和の最期にまつわる心打たれる逸話である。勇敢かつ無謀な作戦の下、個々の事情と背景を持つ男たちが義務を遂行すべく果てていった。その数、三千の骸が今も水底深く埋没している。ヨモツヒラサカは黄泉の国と現世との境にあると言われる坂である。この坂を経てあの世に至る。あの世への入り口に佇み、現世へ向けて発信した一通の打電がカタカナの部分である。受取人であるこの世の遺族たちは、幻の便りに慟哭し、死に就く者の優しさに号泣する。酸鼻をきわめた戦場そのものとも言うべきヨモツヒラサカに、可憐なスミレの花が咲く光景を、誰に描くことができようか。父母や妻子、愛する者たちを守るべく出陣した者が己の死のただ中で己の死以上に囚われなくてはならなかったのは、遺される者の命であったのではないか。「大和」が喚起する諸々とあまりにかけ離れたスミレとの結合が戦争と平和を問いかけているのである。怒りや悲しみ、主義主張といった生々しい感情を昇華した強い感動を与える句である。

箸置に箸八月十五日 川崎展宏

箸置のハ、箸のハ、八月のハの韻がリズムカルでシンプルな句であるが、「八月十五日」の心象を描いたとなると「箸置に箸」の日常の景色が動きを止めてしまう。スムーズに流れていた映像が大きなショックによって停止し、押しても叩いても微動だにしなくなったような状態を思わせる。実際、時の流れはこの日、一旦停止し、方角転換をして流れ出したようなものだ。流れが変わったのだからそこには渦が生じ、意味のちがった混乱が生じた。ちゃぶ台の箸とテーブルの箸という別々の映像が半世紀を隔てて激しく入れ替わりを繰り返す。前者は食べ物等待箸かつ誰も手にとれない箸、後者は人を待つ箸そして人が選ぶ箸である。前者が手つかずなのは陰膳であるからかもしれないし、セッティングすべき飯も汁も整わないからかもしれない。つまり飢えと飽食の両極をこの句の箸は表している。箸置に箸がある当たり前の光景が拝み奉っていただく有り難いものであったという当時への思いは深い。箸という小さくて日常的な道具が、庶民の食という生活の基本、最低限度の人間らしい暮らしを脅かしたものにへ向けた刃に見えてくる。

## 2. 矢島渚男の近作から（昭和十年生まれ、現在七十歳）

黒塗りの昭和史があり鉦叩き 矢島渚男

昭和という時代を表す言葉は世代や立場によってさまざまであり、知識として知るはらかな時代に対するようには統一することはできない。江戸時代を武士と町人の時代と一言で表すのに倣えば、昭和は天皇の時代であり民衆の時代である。江戸時代が武士と町人が共存した時代であったのに対して、昭和は天皇と人民が共生したという時代ではなく、終戦を境に主権者が変わったという時代である。一つでは代表できない二つの顔を持つ昭和史は今後いかなる時間が流れたとしてもどちらか一つに代表されることにはならないだろう。作者の思いは天皇の時代に代表される昭和にある。「黒塗り」とは当局に不都合と見なされた教科書などの記述が墨で黒く塗り潰された事実を指す。黒とは時には忌まわしい色彩の代表になる。黒は象徴的な意味をもつ。闇、恐怖、悪夢などを連想させその他のいっさいの色を否定する。「黒塗り」が多くの国民に不幸以外の何もかももたらさなかったことを作者は今なお記憶しているのである。人々に目隠しをしたという黒い歴史を作者は淡々と叙述する。「黒塗りの昭和史」が語る語り切れない歴史の事実がこのような形で人々に提示される。「鉦叩き」の音を忌む者はあるまい。八月ごろになると夜ごとに心にしみ入るように澄んだ鳴き声が響く。物思いに誘う虫の音である。

### 3. 遠山陽子の近作から（昭和七年生まれ、現在七十三歳）

八月が来る金庫から日章旗 遠山陽子

八月には二つの顔がある。生きとし生けるものすべてが躍動するエネルギーで明るい顔が一つ、もう一つは終戦の日につながる暗い記憶の顔である。現在の顔と過去の顔ともいえるだろう。その八月を迎える気持ちは単純に一色とはならない。たいていの日本人は単純ではない心持ちで八月を迎えるだろう。八月とは複雑な感情で迎える月である。日の丸の旗からまず連想するものは世代によって大きな差がある。オリンピックなどイベントに沸き立つ中では明るいイメージが先になる。しかし、はためく日章旗の波にセピア色の映像が重なる世代もある。旗に見送られて出征していった人々の一つ一つの生きていた命と消えた命が重なる。渡邊白泉の〈夏の海水兵ひとり紛失す〉〈戦場へ手ゆき足ゆき胴ゆけり〉など、戦争を詠んだ俳句が今も細々と読まれている。

さて、金庫から日章旗が出てきたとは痛烈な皮肉である。今という時代からすると金庫と日の丸の組み合わせは意外性が強いが、ある時代には日の丸イコール金庫に保管すべきものであったのだ。それだけの価値あるもの、民族の誇りを象徴するものとしての日の丸は、戦争を経験するつど変質し、純粋な感情で向かい合うことが困難な物になっていることを否定できない。国旗としての日の丸は美しい。デザイン、色彩など万国旗の中で最もシンプルな美しさをもつといってもよいだろう。しかし、単純な気持ちでそのシンプルな美を讃えられない世代がある。物としての日章旗と象徴としての日の丸との間に生じた亀裂がこのような句を生み出す。

#### 4. 後藤比奈夫の近作から（大正六年生まれ、現在八十八歳）

古もんぺ昔は国を愛しけり 後藤比奈夫

モンペは作業着に適した機能的な衣類として今日でも健在であるが、モンペといえば戦時下の女性の普段着のイメージが強い。防空頭巾にモンペのいで立ちで戦火の中を逃げ惑う映像を何度となく見てきた。向田邦子のテレビドラマなどでは戦中の東京の下町の主婦の日常着として登場してくる。近年、そのモンペをモダンにリホームしたファッションが流行ったこともあるが、「古もんぺ」であるからやはり戦時中のものと考えたい。当節の文部科学省どころではない強引さで愛国心が喧伝され、それを素直に受け入れた人々も多かった時代である。国を愛するのはこの国の人にとっても自然の感情である。普遍的な情とってよいだろう。しかし、その感情が操作され、それによって不幸な歴史をたどらなければならなかったということも世界に珍しくはない。作者は純粋にこの国を愛惜した日々を懐かしく回想し、当節の不節操な有り様をちくりと揶揄する。純粋な愛国心を純粋な心から抱くことを憚る勿れと言うのである。その国の人間としての自然の情を尊いと思うのである。昔の愛国心と現在の愛国心との間に何の差異もない立場からの素直な感慨がほろりとこぼれたような印象である。昔も今も国を愛する。いや、今は、日本をなどと小さなことは言わない。日本を含んだ大きな世界を、地球ごと、いやいや、宇宙ぐるみ愛する心境なのだ。自国を愛さないで世界を愛することなどできるものではない。

自決出来さうな水鉄砲のあり 後藤比奈夫

「自決」とは強い抗議や意思を表明するために自らの命を断つことをいう。沖縄戦では集団自決という事実があった。ここ数年は自爆という言葉が毎日のようにニュースになっている。自爆テロの脅威は我が国にも及んでいる。自爆の場合は敵の命を狙う。自殺に代わって自死という言葉もよく使われるようになった。これらの言葉はどれも穏やかではない。どれを使うかによって死ぬ背景が異なり、死の理由が違って来る。鉄砲という凶器を目の前にして作者の場合は自決という言葉が浮かんだ。悲しいことである。戦争の記憶や世相がそのような連想を誘ったものと思う。自決という言葉の思い浮かべて作者自身が悲しい気持ちに陥っただろう。凶器といっても子供の夏の楽しい水遊びの玩具である。一読、楽しく涼しい気分させてくれる句であった。しかし、自決という言葉の連想する歴史をもつ民族としての哀しみが襲ってきた。作者にこの二つの気持ちがある。

## 5. 成井恵子の近作から（昭和十二年生まれ、現在六十八歳）

さとうきび畑に戦争眠らせる 成井恵子

沖縄は太平洋戦争中国内で唯一地上戦の舞台となり、多くの一般人が苛酷な戦況の果てに悲惨な結末を迎えた所である。土地の人々が日常生活を営んでいる地上を戦火が襲った。人々は逃げ惑い、安全地帯と錯覚してさとうきびの生い茂る中に身を隠した。そこに放たれた火は猛火となって人間もろとも焼き尽くした。今、さとうきび畑に戦争が眠っている、いや、眠らせている。「眠らせる」は使役の用法である。戦争を擬人化し、その戦争を今現在は人間が封じ込めているとする。もしも、戦争が目を覚ますことがあったならば、さとうきび畑の悲劇が再び起こる。「眠らせる」という使役する力を人間が失った時を予想させて、この表現は不気味な現実感がある。終戦後、さとうきび畑が元に戻ったのではない。復元できない悲しみをはらんで今もさとうきび畑が存在する。この句における「戦争」は、人間の過ちによって起こしてしまった戦争と人間の賢明な力で今は眠らせているがまたいつ起こらないとも限らない戦争という二つの意味をもつと解釈したい。一九六〇年代に「さとうきび畑の唄」がヒットし、昨年は同名のテレビドラマが放映された。「ざわわ、ざわわ」で始まる静かな歌声は心をとらえる。それらの歌やドラマは沖縄戦を描いたものである。インターネット上で調べたところ、歌い出しの「ざわわ、ざわわ」が「サマワ、サマワ」と聞こえると書いているものがあつた。戦争は、やはり仮死状態であるに過ぎず、いつ、目を覚ますかもしれない脅威である。

## 6. 岡本眸の近作から（昭和三年生まれ、現在七十七歳）

どこかに戦火みな俯せの朴落葉 岡本 眸

朴の葉は個性的な形と大きさとで目立ち、種々の落ち葉の中でも紛れるということがない。表を見せたり、裏を見せたり、横向きになったり、その終焉の姿形はさまざまである。目につき易く、手に取ってみたり、どの枝から散ってきたのかと仰いでみたりする。今年、その自然な散り方に共通して異変があつた。季節になれば季節に従って散りゆくのはものの道理、自然の摂理である。散る寂しさにこの世の真理が存在する。だが、どの一枚も、どの一枚も、俯せという形で散っている有り様は、自然の摂理に反する異常事態、非常時である。一本の朴の木に何枚の葉がついていることか。すべてが散るといふのはよしとして、そのすべてが裏返しになっているという不自然さ、異様さ。そこに、「どこかに戦火」への戦慄がある。不自然さへの戦きである。朴の葉は大きい。枯れ葉に平たさはなく、葉脈の加減でこぼこと波打ち、乾燥するにつれて傷み、敗れ、縮こまる。重なり合い、あるいは離れ離れに地に伏している様が、戦火に倒れた人間の亡骸に重なってくる。朴の落ち葉が散り敷く有り様に戦場を重ねた。作者



は二つの映像を交錯させた。一つは目に映った画像、一つは心に映った画像である。「俯せ」の一枚一枚をクローズアップしていき、その一枚ずつにメッセージをこめる。

### 終わりに

昭和三十一年生まれの作家奥泉光は平成十四年に小説『浪漫的な行軍の記録』を、昭和四十五年生まれの作家古処誠二は平成十五年に小説『分岐点』を発表している。共に自らは体験していない戦争を現時点でとらえ直そうとした作品である。すでに多くの人々によっておびただしい戦争文学やドキュメンタリー作品、手記などが発表されている。学生には、『きけわだつみのこえ（日本戦没学生の手記・東大共同組合出版部）』『長崎の鐘（日比谷出版社）』『夏の花（能楽書林）』『人間の条件（光文社）』『ヒロシマ・ノート（岩波新書）』などを読むことをまずは奨励したいが、俳句という文芸を借りて歴史を伝えていくことも可能であり、意味のあることだと考える。詩人エズラ・パウンドの「最小の言葉で最大のことが言えるのが最高の文学だ」の言葉を信じ、世界最小の俳句の可能性を広げていきたいと思う。

戦後六十年の平成十七年八月、およそ四十年ぶりに広島を訪ねた。毎年毎年八月十五日に平和公園で行われる式典の模様を新聞・テレビなどで見てきたためか、二度目というよりよく知っている所という印象を受けた。広島街に目を移すと、広島といえば「ヒロシマ」という片仮名表記が浮かぶ街とは全く違って、太田川はじめ水量豊かな川が幾筋も流れ、滴るような緑の木立がいたる所に見られ、活気のみなぎるしかも落ち着いた街として映じた。語り尽くせない被災地獄を内に秘め、復興と平和への強い願いのもとに世界へ平和を発信する街の風格を感じた。